



Title	小節の構造について
Author(s)	大庭, 幸男
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1992, 26, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47811">https://hdl.handle.net/11094/47811</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 小節の構造について

大庭 幸男

### 1. 序

生成文法の研究において最も論争的になっている問題の1つは、小節 (Small Clause) の範疇やその内部構造についてである。

(1) a. I consider [John intelligent].

b. I let [the cat into the house].

小節が何故問題になるのかというと、それが意味的に主語と述語からなる節を構成しているにもかかわらず、統語的には通常の時制節や不定詞節と異なり、CやIを含まないという奇妙な特徴を持っているからである。

(2) a. \*I didn't consider {that/if/whether/for} it suitable.

b. \*I consider your attitude {to/can} deeply offensive.

(Radford 1988)

このような小節に関して今までさまざまな分析が行われてきたが、それらはおおよそ次の2つのタイプに大別することができる。

(3) a. 小節は構成素をなさない。

b. 小節は構成素をなす。

前者は Williams (1980, 1983) によるもので、(4)のような構造が提案されている。

(4) I [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> consider ] [<sub>NP</sub> John][<sub>AP</sub> intelligent]].

(4)の特徴は、小節の主語である *John* と述語の *intelligent* が主文の動

詞 *consider* の補部の位置に生起していることである。しかしこの構造には、二項枝分かれを重視する最近の X-bar 理論にはうまく適合しないという問題がある。<sup>1)</sup> 一方後者は、多くの学者によって主張されているが、小節の範疇並びにその内部構造については必ずしも見解が一致しているわけではない。そこで代表的な分析を揚げるとすれば、次のようになるであろう。

- (5) a. AP 分析: Stowell (1981, 1983, 1987), Chomsky  
(1981, 1992)

I consider [<sub>AP</sub> John [<sub>A'</sub> intelligent]].

- b. AP 付加構造分析: Chomsky (1986)

I consider [<sub>AP</sub> John [<sub>AP</sub> intelligent]].

- c. S' 分析: Kitagawa (1985)

I consider [<sub>S'</sub> John intelligent].

- d. AgrP 分析: Nakajima (1991)

I consider [<sub>AgrP</sub> John [<sub>Agr'</sub> Agr [<sub>AP</sub> intelligent]]].

このようにさまざまな分析が試みられているということは、小節にはまだ解明されていない数多くの問題が残されていることを示している。

本稿では、小節の構造について(3 a)と(3 b)の中間的な立場にたち、未だ意見の一致がみられない小節の範疇と内部構造を考察し、(4)、(5)の分析に代わる案を提示したい。そこでまず2節では、小節がどのような特徴をもつかを調べ、次に3節ではこの特徴を説明するための小節の範疇と構造を提案する。そして最後の4節は、結びとする。

## 2. 小節の特徴

### 2.1. 小節の主語

今、小節の構造を [NP  $\alpha$ ] とすると、NP が  $\alpha$  に対して主語の地位を

もつことには多くの証拠が指摘されている。<sup>2)</sup>

(6) a. Subject Expression:

I consider [*it* time to leave].

b. Emphatic Reflexive:

I consider [the president entirely responsible *himself*].

c. Binding Phenomena:

Mary considers [Bill kind to *himself*/\**herself*].

Mary considers [Bill too kind to *her*/\**him*].

d. *not*-initial NP:

I consider [*not many people* suitable for the post].

e. *alone*-final NP:

I consider [*Bill alone* responsible for the accident].

f. Subject Condition:

?\*Who do you consider [*the oldest sister of t*] foolish.

(6 a)では、小節 [NP α] の NP の位置に *it* が現れている。この要素は主語の位置しか現れないので、NP は主語の位置を占めているといえる。同様に(6 d, e)でも、主語にしか生起できない要素である *not*-initial NP や *alone*-final NP がこの NP の位置を占めている。したがって、これらの例も NP が主語として機能していることを示している。一方(6 b)では、強調の再帰代名詞が現れている。一般にこの要素は、(7)に示されているように主語の NP を先行詞として取るという特性を持つので、

(7) a. John is leaving *himself*.

b. \*I promised him to leave *himself*.

(6 b)の *the president* は主語の位置を占めていることになる。また(6 c)は、小節が再帰代名詞や代名詞の統率範疇であることを示す。統率範疇と

は概略すると、これらの要素の統率子と主語を含む最小の S あるいは NP である。したがって、再帰代名詞や代名詞の統率範疇が小節だとすれば、(6 c) の *Bill* はその主語であるといえる。さらに(6 f)の非文法性は、[*the oldest sister of t*] が主語の位置にあるとすれば簡単に説明することができる。なぜなら、一般に主語の位置にある要素の一部は摘出不可能であるからである。

- (8) a. \*Who would [*for John to visit t*] upset you?  
 b. \*Which book did you believe [*the author of t*] to be eloquent?

以上より、小節 [NP  $\alpha$ ] において NP は主語の位置を占める、と結論づけることができると思われる。

## 2.2. 一 致

次に、NP と  $\alpha$  の間に性・数・人称の一致がみられるかどうかについて考えてみよう。周知の如く、現代英語における名詞、代名詞、形容詞の屈折形態は非常に貧弱である。したがって、小節の主語である NP と述語の  $\alpha$  の間に一致が存在するという証拠は示し難い。しかし名詞の場合、数について語形変化するので、次のような例は小節に一致が存在することを示唆するであろう。

- (9) a. I consider John and Mary good tennis players.  
 b. \*I consider John and Mary a good tennis player.

一方、言語の中には名詞、代名詞、形容詞が性・数・人称に関して厳格に屈折するものがある。例えば、次のフランス語の例を考えてみよう。

- (10) a. Je trouve ces filles belles.  
 I find those girls beautiful  
 [+fem. +plu.] [+fem. +plu.]

'I find those girls beautiful.'

b. \*Je trouve ces filles belle.

I find those girls beautiful

[+fem. +plu.] [+fem. +singu.]

(10)の小節の主語である *ces filles* は、女性・複数である。このことに注目して(10)を考えると、(10 a)と(10 b)の文法性の違いは小節の主語と述語の間に性・数に関して一致が存在しなければならないことを示している。なぜなら、文法的な文である(10 a)では、述語の *belles* が女性・複数であるので主語との一致がみられるが、非文法的な文である(10 b)では述語の *belle* が女性・単数であるので、主語との一致が正しく行われていないからである。

同様に、次のスペイン語の例も小節の主語と述語とは性・数に関して一致しなければならないことを示している。

(11) a. Considero claro el asunto.

I-consider clear the matter

[+mas. +singu.] [+mas. +singu.]

'I consider the matter clear.'

b. Dejamos limpios los cubiertos.

we-left clean the silverware

[+mas. +plu.] [+mas. +plu.]

'We left the silverware clean.'

(10), (11)より、屈折の豊かな言語では小節の主語と述語の間には性・数・人称の一致が存在するといえる。

英語では屈折語尾形態が貧弱なため、小節に一致が存在するかどうかは疑わしく見えるが、他の言語を観察すると一致が存在する証拠がある。したがって一般的に、言語において小節の主語と述語の間には一致が見られ

る、と結論づけることができるであろう。

### 2.3. Scope について

Williams (1983) は次の文の quantifier phrase (QP) *someone* の scope に注目し、(12a) では曖昧で *someone* は主文と埋め込み文を scope としてとるが、(12b) では曖昧ではなく、主文しか scope にとらないと観察している。

(12) a. [<sub>IP</sub> Someone seems [<sub>IP</sub> t to be sick]].

b. [<sub>IP</sub> Someone seems [t sick]]. (Williams 1983)

May (1985) の Quantifier Raising (QR) や Quantifier Lowering (QL) の分析によれば、(12a) では *someone* が主文の IP と埋め込み文の IP にそれぞれ QR と QL によって付加されることになる。その結果、*someone* が主文と埋め込み文を scope にとり、曖昧な解釈を持つことになる。一方(12b)では、*someone* の scope は(12a) と異なり曖昧ではない。この事実は、小節が構成素をなすと主張する(5)の分析にとって重大な問題となる。なぜなら、May の分析が正しいとするなら、*someone* が QL によって(12a)の埋め込みの文の IP に付加されるのと同様に、(12b)でもその操作によって構成素をなす小節に付加されてもなんの不都合も生じないからである。したがって、小節が構成素をなすと主張する分析は、上の事実を説明しなければならないであろう。<sup>3)</sup>

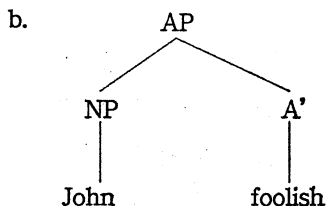
## 3. 小節の範疇と内部構造

### 3.1 先行研究の問題点

1 節において、小節が構成素をなすと主張する分析の中で代表的なものを(5)に示した。本節では、その内の1つ、つまり(5a)の分析を参考にしながら小節の範疇と内部構造を考えていきたい。<sup>4)</sup>

Stowell (1981, 1983, 1987) や Chomsky (1981, 1992) では、小節の範疇は述語の最大投射であり、主語がその最大投射の指定部にあるという内部構造が考えられている。彼らの分析に従うと、例えば(13a)の小節は(13b)のような構造をもつことになる。

(13) a. I consider John foolish.



しかしながら、(13b)の構造には次の3つの問題点がある。まずその1つは、述語の投射に関係している。彼らの分析のように、もし小節の範疇が述語の最大投射であるとするならば、その述語には最大投射が生じ得ないことを予測する。しかし、この予測は正しくない。次例を考えてみよう。

(14) a. I consider John the best player in our team.

b. I'd never considered John that fond of his mother.

(Radford 1988)

(14a)、(14b)では、述語にそれぞれ最大投射の NP, AP が現れている。したがって、小節の範疇がその述語の最大投射であるなら、(14)の例は非文法的になるはずである。

第2の問題点は、最大投射の指定部要素の抽出可能性についてである。Radford が指摘しているように、一般に NP, AP, PP などの指定部にある要素は前置することはできないが、小節の主語は前置可能である。

(15) a. \*So is he [<sub>AP</sub> t fond of Mary] that he won't leave her.

b. \*John's I quite fancy [<sub>NP</sub> t new girlfriend].

c. \*Right it spilled [<sub>PP</sub> t over the carpet].



(16) a. John I consider [t very stupid].

b. Who do you expect [t off your ship by midnight]?

(Radford 1988)

この事実は、小節の範疇がその述語の最大投射であるとする彼らの分析では説明することができない。なぜなら、小節の主語は NP, AP, PP と同様、最大投射の指定部にあるからである。

第3の問題点は、小節の等位構造に関してである。等位構造というのは、等位接続詞 *and*, *or*, *but* などによっていくつかの要素が結び付けられた構造である。この構造で注目すべきことは、等位接続詞によって結び付けられる要素の範疇が同一でなければならないことである。

(17) a. I saw [<sub>NP</sub> the dog] and [<sub>NP</sub> the cat].

b. \*I saw [<sub>NP</sub> the dog] and [<sub>Adv</sub> carefully].

このことを念頭にいれて、次の例を考えてみよう。

(18) a. \*I saw Bill [<sub>PP</sub> with a strange mask on] and [<sub>VP</sub> lying on the sofa].

b. I saw [Bill with a strange mask on] and [Tom lying on the sofa].

c. What I saw was [Bill with a strange mask on] and [Tom lying on the sofa].

(Hayashi 1991)

(18a)は *and* で結び付けられている要素が PP と VP であり、範疇が一致していないので非文法的な文になっている。ところが、小節が *and* で結び付けられている(18b, c)は文法的である。これは、結び付けられている小節の述語の範疇が異なるとしても、小節全体の範疇は同じであることを示している。しかし、小節の範疇が述語の最大投射であると主張する Stowell や Chomsky の分析では、この事実を説明することができない。なぜなら、彼らの分析では *and* で結び付けられている小節の範疇は、

述語の範疇の種類によって異なるからである。

以上、小節の範疇が述語の最大投射であると主張する分析の問題点を指摘した。次節で、この問題点を解決するような小節の範疇の内部構造を提示したい。

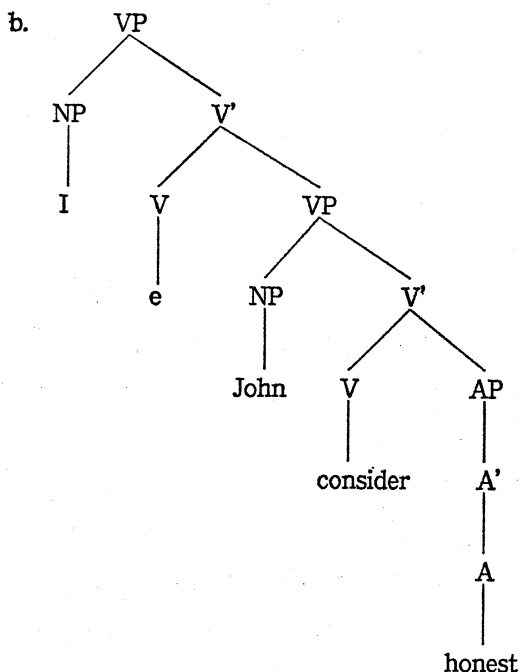
### 3.2. 代 案

3.1で指摘したように、小節は等位接続詞 *and* 等で結び付けられる。したがって、小節は述語の範疇の種類を問わず同一でなければならない。このことを説明するために、Larson (1988) の分析を基本的に採用し、小節の構造を提案することにする。

Larson の分析の特徴は、(i) Single Complement Hypothesis と (ii)項の具現化原理を仮定していることである。前者は X-bar 理論に関する仮説で、これにより構造は二項枝分かかれによって構築されることになる。一方後者は、ある述語がいくつかの項を取る場合、それらの項はすべてその述語の投射内で具現化されなければならないことを主張する。

したがって Larson の分析によると、例えば(19a)のような文の構造は(19b)のようになるであろう。<sup>5)</sup>

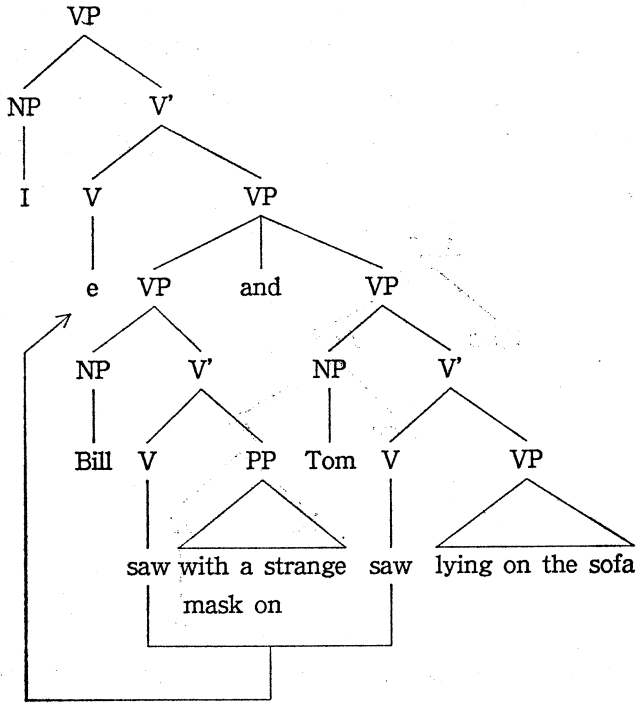
(19) a: I consider John honest.



この構造には、次の3つの利点がある。その第1の利点は、3.1で指摘したように小節の述語は最大投射でなければならないが、(19b)の構造ではこのことが自動的に説明できることである。また第2の利点は、最大投射の指定部にある要素の抽出に関してである。VP内主語を仮定しているLarsonやChomsky (1992)では、VPの指定部はAP, NP, PPの指定部と異なり抽出が可能である。したがって、3.1で示した(16)の例は、この構造を仮定すればなんら問題にはならない。そして第3の利点は、小節の等位構造についてである。もし小節の構造が(19b)であるとすれば、3.1で示した(18b)の例は(20)のような構造になるであろう。

- (18) b. I saw [Bill with a strange mask on] and [Tom lying on the sofa].

(20)



(20)では、*and* で結ばれた要素は VP である。この構造から(18b)のような構造を派生するには、VP の動詞である *saw* が empty V に移動しなければならない。<sup>6)</sup>

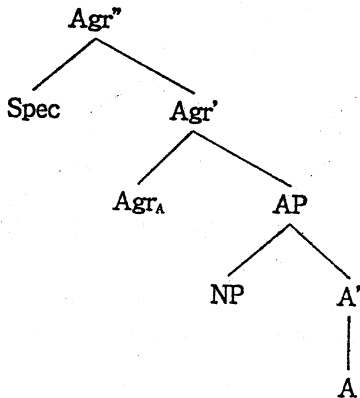
### 3.3 この分析の結果

#### 3.3.1 一致について

3.2では、Larson の分析に基づいた小節の範疇と内部構造を示した。しかし、この構造はまだ適切ではない。なぜなら、2.2で指摘したように小節の主語と述語は性・数・人称に関して一致しなければならないが、この事実がまだ説明されていないからである。

3.2で述べたように、Chomsky (1992) は小節の範疇をその述語の最大投射とし、さらにその指定部に小節の主語が存在すると仮定している。しかし、彼の分析はこれに留まっているわけではない。彼は今問題としている小節の主語と述語の一致を説明するために、小節の上位節点として  $\text{Agr}'$  を設けている。つまり、次のような構造を仮定している。

(21)

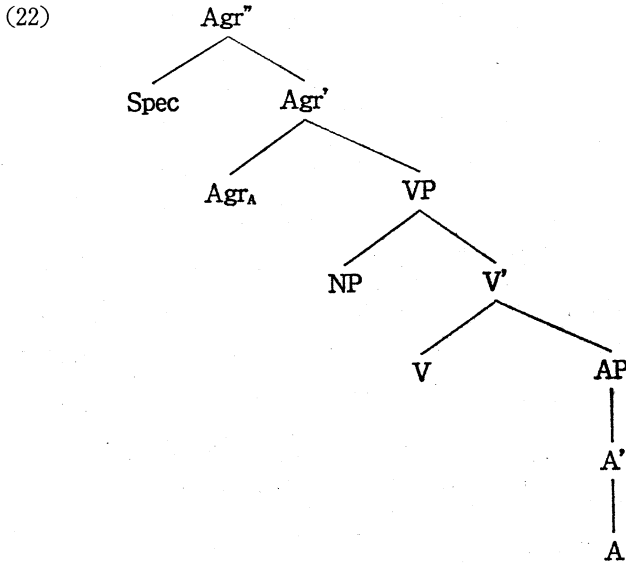


(21)の  $\text{Agr}_A$  は形容詞に関連する性・数・人称などの  $\phi$  素性の集合である。Chomsky の分析によれば、動詞や名詞などは実現形で辞書から取り出され、句構造中に導入される。さらに、それらの語が有する性・数・人称等の  $\phi$  素性、格素性、時制素性などは指定部—主要部あるいは主要部—主要部の一致関係で非語彙範疇  $T$ ,  $\text{AGR}$  に含まれる素性と統一的に照合される。もし照合の結果、素性が一致していなければ、派生そのものが破綻をきたすようになっている。

したがって(21)では、 $\text{NP}$  と  $A$  が辞書より実現形として挿入され、それらがもつ  $\phi$  素性や ( $\text{NP}$  の場合、格素性を含む) は  $\text{Agr}'$  の指定部と主要部で照合される。そのために、 $\text{NP}$  や  $A$  はそれぞれ  $\text{Agr}'$  の指定部と主要部に移動しなければならない。

3.1では、小節を(21)のように分析すると、問題点が生じると指摘した。

そして、3.2では Larson に基づく小節の構造を示した。しかし、この構造では小節の主語と述語の一致が捉えられていない。そこでこの事実を捉えるために、(21)を参考にして次のような構造を提案したい。



この構造では、小節の主語と述語の一致は Chomsky の分析と同様に行われる。もう一度、2.2で示した例を考えてみよう。

(9) a. I consider John and Mary good tennis players.

b. \*I consider John and Mary a good tennis player.

(10) a. Je trouve ces filles belles.

I find those girls beautiful

[+fem. +plu.] [+fem. +plu.]

'I find those girls beautiful.'

b. \*Je trouve ces filles belle.

I find those girls beautiful

[+fem. +plu.] [+fem. +singu.]

- (11) a. Considero claro el asunto.  
 I-consider clear the matter  
 [+mas. +sing.] [+mas. +sing.]

'I consider the matter clear.'

- b. Dejamos limpios los eubiertos.  
 we-left clean the silverware  
 [+mas. +plu.] [+mas. +plu.]

'We left the silverware clean.'

(9)は(22)のような構造を持つであろう。但し、この文では小節の述語が名詞句であるので、(22)のVと姉妹関係にあるAPがNPになり、主要部  $Agr_A$  が  $Agr_N$  に変わる。小節の主語と述語の一致関係は、Chomskyと同様にそれぞれが  $Agr_N$  の指定部と主要部に移動して照合される。一方(10)、(11)の場合、小節の述語が形容詞であるので語順を考慮にいれなければ、(22)のような構造を持つであろう。そして、小節の主語と述語の性・数・人称の一致は英語の場合と同様に行われる。

### 3.3.2 Scope について

2.3において、(12b)のような小節ではQP *someone* は scope として主文全体のみを取ると指摘した。同じことが(23b)にも言える。

- (23) a. [<sub>IP</sub> John considers [<sub>IP</sub> someone to be sick]].

- b. [<sub>IP</sub> John considers [someone sick]].

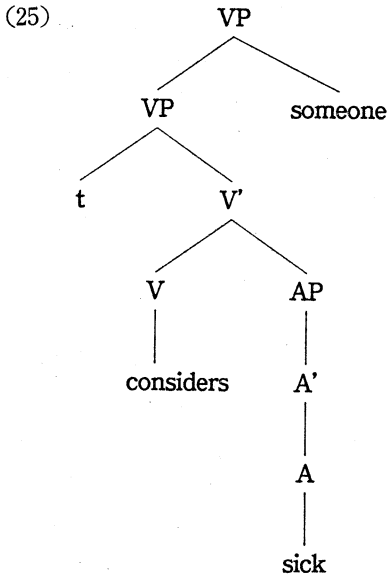
この事実はいかなる分析においても説明されなければならない。

そこで、一般的に仮定されているように、QP は QR あるいは QL によって最大投射 XP に付加されるものとする。その際、Chomsky (1986)によって提案された(24)のような付加条件に従うものとする。

- (24) Adjunction is possible only to  $X^{\max}$  that is a non-argument.

さて、3.3.1で見た最近の Chomsky 理論では、VP 内で生成された主語が  $\text{Agr}_s$  の指定部に移り、その主語の NP に含まれる  $\phi$  素性や格などのN素性が  $\text{Agr}_s$  のN素性やTのN素性と照合された段階で overt syntax が終わる。但し、TのN素性が  $\text{Agr}_s$  を介して主語のN素性と照合されるためには、Tは  $\text{Agr}_s$  に付加されていなければならない。次に LF 部門に移り、動詞Vとその目的語の NP との格の照合が行われる。そのために、Vが  $\text{Agr}_o$  に、そして NP が  $\text{Agr}_o$  の指定部に移動する。そこで、指定部—主要部の一致関係が照合される。

ここで注目すべきことは、overt syntax では predicate は移動せず、LF で初めて移動することである。今上述した Chomsky (1992) の一致に関する分析と付加条件(24)を仮定すると、LF で *someone* は非項である VP に付加されるので、例えば (23b) は次のような構造をもつであろう。<sup>7)</sup>





QP の scope が m 統御領域で決定されるならば (May 1985), (25) の *someone* は *considers* に対して scope を持つ。つまり、主文を scope としてとる。なぜなら、*someone* は *considers* を非対称的に m 統御するからである。一方(23 a)では、主文の動詞 *considers* が構成する VP と埋め込み文の動詞 *be* が構成する VP に *someone* が付加される。したがって、*someone* は主文と埋め込み文を scope にもつことになる。

#### 4. 結 び

本稿で述べたことを概略すると、2 節では小節の特徴を調べ、3 節では小節の範疇をその述語の最大範疇と見なし、主語がその指定部にあると主張する Stowell (1981, 1983, 1987) や Chomsky (1981, 1992) の問題点を指摘し、その代案を示した。

ここで提案された小節の構造は、基本的には Larson (1988) の X-bar 理論を採用したものである。さらに、この構造は Chomsky (1992) の一致に関するシステムが取り込まれている。したがって、この小節の構造は次の 2 つの特徴を持っている。

- (25) a. 述語の項はすべてその投射内で具現化される。  
 b. 項の N 素性 ( $\phi$  素性や格) は Agr の指定部と主要部で統一的に照合される。

(25 a) は Larson の考えである。これに基づいた構造は、例えば Nakajima (1991) で仮定されている構造とは大いに異なる。なぜなら、(5 d) で示したように Nakajima では小節の主語は Agr の指定部で生成されているからである。しかし (25 b) のように、もし非語彙範疇 T、Agr の役割が N 素性や V 素性の照合にあるとするならば、述語の項はその非語彙範疇の投射のなかで基底生成されない方がよいであろう。換言すると、もし非語彙範疇の役割が素性の照合に限られるならば、ここで提案

された構造(22)の方が望ましいかもしれない。

## 注

\* 本稿をまとめるにあたり、春木仁孝氏より有益な助言をいただいたので記して感謝したい。

- 1) Williams の分析に対する反論は Stowell (1987), Contreras (1987) 等を参照。
- 2) (6 a, b, d)は Radford (1988) の、また(6 c, f)は Stowell (1987) の例である。
- 3) Stowell (1987) はこの事実を説明するために、LF で適用される restructuring と Predicate Scope Principle (PSP) を提案している。restructuring は例えば(12 b)の小節の述語である *sick* を主文の動詞に付加する操作である。これによって、主文と小節の2つ述語が1つになり、その結果 *someone* は PSP により小節をその scope にとることができなくなる。
- 4) (5 b)についての反論は Radford (1988) を、また(5 c)についての反論は Contreras (1987) を参照のこと。(5 d)については後述する。
- 5) (19 b)のような構造は、実際 Chomsky (1955/1975) に提案されている。また Larson は、小節に重名詞句移動が適用されたと一般に考えられている次のような例を説明するために、(19 b)のような構造を考えている。

(i) I would consider foolish [anyone who leaves his doors unlocked]. (Larson 1988)

- 6) Larson は(i a)の等位構造を説明するために、2つの VP を *and* で結び付けた(i b)のような構造を立て、(20)と同様、動詞 *send* を empty V へ操り上げている。

(i) a. John sent a letter to Mary and a book to Sue.

b. [<sub>VP</sub> [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> e] [<sub>VP</sub> [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> a letter] [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> send] [<sub>PP</sub> to Mary]]] and [<sub>VP</sub> [<sub>NP</sub> a book] [<sub>V'</sub> [<sub>V</sub> send] [<sub>PP</sub> to Sue]]]]]]]

- 7) ここでは、一般に考えられているように、QP は VP に付加されるものとしている。もちろん、他の非項に QP を付加することも可能であろう。

## 参考文献

Chomsky, Noam. 1955/1975. *The Logical Structure of Linguistic Theory*,

- University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam. 1992. *A Minimalist Program for Linguistic Theory*, MIT Occasional Papers in Linguistics 1, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Contreras, Heles. 1987. "Small Clauses in Spanish and English," *Natural Language and Linguistic Theory* 5, 225-243.
- Hayashi, Ryujiro. 1991. "On the Constituency of Small Clauses," in Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, eds., *Topics in Small Clauses*, 11-25, Kurosio Publishers, Tokyo.
- Kitagawa, Yoshihisa. 1985. "Small but Clausal," *CLS* 21, 210-220.
- Larson, Richard. 1988. "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Larson, Richard. 1988. "Light Predicate Raising," ms., MIT, Cambridge, Massachusetts.
- May, Robert. 1985. *Logical Form: Its Structure and Derivation*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Nakajima, Heizo. 1991. "Reduced Clauses and Argumenthood of AgrP," in Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike, eds., *Topics in Small Clauses*, 39-57, Kurosio Publishers, Tokyo.
- Radford, Andrew. 1988. *Transformational Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Stowell, Tim. 1981. *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Stowell, Tim. 1983. "Subjects across Categories," *The Linguistic Review* 2, 285-312.
- Stowell, Tim. 1987. "Small Clause Restructuring," ms., UCLA.
- Williams, Edwin. 1980. "Predication," *Linguistic Inquiry* 11, 203-238.
- Williams, Edwin. 1983. "Against Small Clauses," *Linguistic Inquiry* 14, 287-308.

(文学部助教授)